

《翻訳》

「ステップと定住」

ビョートル・サヴィツキー

I

ロシアを取り巻く世界におけるロシアの位置は、さまざまな観点から検討することができる。ロシア文化の歴史的発祥の地である旧世界¹⁾の西半分の一連の「個々の歴史」の中にロシアを位置づけることもできるし、旧世界をある一貫性のある統一体と理解した上で考えることもできる。本稿でわれわれは、まさに一貫性のある統一体としての旧世界の歴史的運命と地理的本質の検討を前提とする、幾つかの歴史的、経済地理学的指摘を行いたい。このような理解に立つと、一方に、旧世界の「周辺=沿岸」地域（東部く中国）、南部くインドとイラン）、西部く「地中海」と西欧）、他方に、ステップ遊牧民、「トルコ人」あるいは「モンゴル人」の「伸縮自在の大群」に満ちた世界である「中央」世界という対比が成立する。この対比は、過去数千年にわたる旧世界の歴史のメカニズムを明らかにしてくれる。つまり、「周辺=沿岸」圏の創造力によって一定の領域へと内部成長してゆく諸文化と、伝播の意義を有し、周辺=沿岸圏の創造力の成果を取り入れ、それを遊牧と征服の過程で、他の領土的に極めて「不動の」世界に伝えていく「ステップ」文化との相互関係の理解に役立つのである。

まず初めに指摘しておくが、「タタールのくびき」がなければ、ロシアは存在しなかったであろう。タタール以前の「キエフ」ルーシの文化的発展を

褒めそやし、あたかもそれがタタールの侵攻によって破壊され中断されたかのように言うことほど、陳腐で不正確なことではない²⁾。11、12 世紀の古代ルーシによる一定の、そして大きな文化的達成を否定する気はまったくない。しかし、その達成の歴史的評価は、歪められた評価である。11 世紀前半から 13 世紀前半にかけて、タタール以前のルーシで極めて顕著に進行していた政治的、文化的矮小化のプロセスが見落とされているからだ。この矮小化は、11 世紀前半の相対的とはいえ政治的統一が、その後の分領制³⁾の混乱に取って代わられるときに現れた。矮小化は、たとえば芸術の分野における物的資質の低下に見られる。建築の分野では、当時の主だった中心地いずれにおいても、規模が大きく、装飾が豊かな寺院は常に早期に建てられたものであることが、この低下を表わしている。聖ソフィア寺院を前に後期のキエフの寺院が色褪せて見え、聖スパス寺院を前に後期のチェルニゴフの寺院が、聖ノブゴロド・ソフィア寺院を前に後期のノブゴロドの寺院が、ウスペンスキー寺院を前に後期のウラジーミル・スーズダリの寺院が色褪せて見える⁴⁾。芸術的、物的資質の奇妙な「逆発展」である。初めに最大の成果があり、その後の進化の過程には、「縮み」、規模の縮小がある。同時期に進行した西欧のロマネスク、ゴシック建築の発展とは、まったく対照的だ！

11 世紀前半のキエフの聖ソフィア寺院は、規模と装飾において、同時代の西欧のロマネスク寺院に立派に対置されるとして、1215 年に完成したパリのノートルダム寺院の前で、ロシアで同時代に建てられた、ゴリエフ・ポリスキーの聖ゲオルギー教会やノブゴロドのスパス・ネレディツァ

教会⁵⁾の類は何を意味するというのだろうか。われわれは、あれこれの寺院の美的価値に触れるつもりはない。物的規模において13世紀初めのルーシは惨めな状況を呈しており、西欧とくらべた規模の差は、十分の一、百分の一である。タタールのくびきの結果ではなく、それ以前に起こった真の「立ち後れ」である！

ルーシがタタールに降伏した無力を、「不幸な偶然」とみなすのは非論理的であろう。タタール以前のルーシの存在には、不安定、退廃の傾向があり、それが、ほかならぬ異邦人のくびきをもたらすしかなかったのである。これは、一連の諸民族に共通の特徴であり、個々のスラブ民族の中世史および近現代史は、一つのパターンで構築されているかのようだ。いくらかの初期の繁栄の後には、繁栄の強化に代わって墮落、衰退、「くびき」が続く。これが、スラブ化したブルガリア人、セルビア人、ポーランド人の歴史であり、タタール以前のルーシの運命も同様である。内部の墮落のせいでルーシが倒れねばならなかった時に、ほかならぬタタールの手に落ちたことは、ルーシにとっての大きな幸いであった。「ありとあらゆる神々」を受け入れ、「いかなる信仰」をも容認する「中立の」文化集団であるタタールは、神の与えた罰のようにルーシに降りかかったが、民族の創造力の純粋さを濁すことはなかった。もしルーシが、「イランの狂信と高揚」に感染したトルコ人の手に落ちていたならば、その試練ははるかに困難に、運命ははるかに辛いものになっていたであろう。もし西欧が占領していたならば、西欧はルーシから魂を引き抜いてしまったであろう…。タタールは、ロシアの精神的本質を変えることはなかった。しかし、当時の彼らに特徴

的であった、国家、軍事的組織力の創設者という面では、紛れもなくルーシに影響を与えた。

手本となる行動によってか、為政者に気質を植え付けることによってか、とにかくタタールはロシアに、軍事的に組織し、強権国家の中心を築き、安定を得るという特性を与えた。タタールはロシアに、強力な「ハーン国」になる資質を与えたのである。

外モンゴルからキエフ、アテネ、アンゴラ⁶⁾、アングゴルまで到達するには、厳格と貪欲を持ち合わせているだけでは不十分であったかもしれない。これを成し遂げるには、ステップや山、オアシス、森を特殊な方法で知覚し、計り知れぬ希求を感じる必要があった。はっきりと述べよう。全世界の歴史的空間において、西欧の海の感覚に対して、対極的ではあるが同等に対置されるのは、唯一モンゴル人の大陸の感覚である。ところが、ロシア人の「陸の探検家」の間には、ロシア人の征服と開発の広がりの中には、同様の精神、同様の大陸の感覚がある。しかし、モンゴル人は、本来の意味での「植民地支配者」ではなかったのに対し、ロシア人は植民地支配者である。これは、ロシアをすべて「モンゴル風」に帰すことは決してできないという数多くの証左の一つである。また、タタールのくびきそのものが、ロシアの国家編成に寄与し、それまで眠っていた習性を教え込むか発見するかしたと同時に、ロシアの精神的特異性を鍛える坩堝であった。その精神的特異性の核心は、ロシアの敬虔である。そして、現在あるままのこの敬虔、ロシアの精神生活を過去に育み、また今も育てているこの敬虔は、まさに「タタール支配下」の時代に築かれたのである。タタール以前

のルーシでは個々の特色、片鱗でしかなかったが、「タタールの」ルーシでは、神秘的な深まりと理解に満ち、ルーシの優れた創造であるロシア宗教画が現れた。その最盛期は、完全に「タタールのくびき」の範囲に納まる。この驚くべき対比の中に、つまり、神の罰という自らの役割によってタタール人はルーシを浄化、神聖化し、自らの手本によってルーシに強力な習性を植え付けたという、この対比の中に、ロシアの二重の顔が現れている。ロシアは、偉大なるハーンらの継承者であり、ジンギスカンとティムールの事業の後継者であり、アジアの統一者である。ロシアは、特殊な「周辺=沿岸」世界の一部であり、深い文化的伝統の担い手である。ロシアの中では、歴史的な「定住」と「ステップ」の要素が同時に結合している。

I I

タタール以前の時代のロシア人住民は、おそらく、ステップに奥深く入ることはなく、ドニエプル川流域やデスナ川流域などの「森林ステップ」のかなりの部分を占めていた。タタール支配のもとでは、ロシア民族は森林に「身を潜めて」いた。タタール時代以後もっとも重要な歴史的事実となったのは、ロシア民族のステップへの拡散、ステップの政治的、民族的開拓である。このプロセスは20世紀初頭までに、黒海、アゾフ海、またカスピ海と中央アジアの一部の「ステップ」空間への入植をもって完了した。自己存在の中に、紛れもない「ステップ」(主に「アジア的」)様式の特徴と西部「周辺=沿岸」世界の文化的性格への明確な接近とを結合させながら、今日あるロシアは、領土的意味においては、幾つかの西欧地域の地理

的本質を再現する領域と、性質上、決定的に「ヨーロッパ外」である諸国の広がりとの組み合わせになっている。クリヴィチ族、ドレヴリャーネ族、ポリャーネ族、セヴェリャーネ族など⁷⁾の土地である森林地帯および森林ステップ地帯の一部は、ドイツなどエルベ川以東のヨーロッパ諸国がやや変化したようなもので、概して、同じ降雨量、同じ土壌であり、いくらかの気候的差異はあるものの、植物生育に違いを来すほどではない。ロシア人居住地の最北であるオロネツ郡とアルハンゲリスク郡の西半分は、いくぶん気候に「恵まれない」とはいえ、スカンジナビアの自然の基本的特徴をすべて再現しており、さながらスカンジナビアの一部であるかのようだ。ステップに対するロシア人のかかわり方の特異性は、ロシアの民族的本能が、昔から遊牧生活に使われてきたこの空間を農業地帯に変えた点にある。このプロセスの性格を評価するにあたっては、植民されたステップの農業がおかれている経済地理的環境を、可能な限り十分に明らかにする必要がある。北アメリカ、特にその東半分では、ヨーロッパの農業者たちは、既知の気候・土壌の状態がある程度正確に再現されたものを得ており、根菜および牧草*の播種などヨーロッパであみ出した農業「集約化」の方法を、難なくそこで実践している。まさにこのような播種が、国で広く可能であることを、われわれは国の地理的「ヨーロッパ性」の個別化の原則として捉える。(言わんとしているのは、人工灌漑がない中で可能であるということだ。というのは、灌漑は特殊なもので、「ヨーロッパ」特有のものではないからだ!)。根菜および牧草の播種が可能であるという観点からは、ウラル以西のロシアの森林地帯全部と森林ステップ地帯のかなりの部分

が「ヨーロッパ」と規定されることは、疑う余地がない。「ヨーロッパ」地域は「ウラル以東」のルーシにも見られる…。しかし、ロシアのステップは「ヨーロッパ」といえるだろうか。純粋な気候分析も、実務的な経済分析も一様に、ステップ（キルギスとカスピ海だけでなくアゾフ海と黒海のステップも含む）が、根菜および牧草栽培にとり、本質的に不利であることを明らかにしている（過度の乾燥）。ある部分ではきわめて小麦に適しているロシアのステップだが、ジャガイモにもクローバーにも適さない。ところが、ヨーロッパの農業は、主に上述の二種の植物を導入することで、三圃制⁸⁾から他の畑作システムに移行したのである。言い換えるならば、現存の農業技術の観点からは、ロシアのステップは、かなりの範囲において三圃制を免れない地域と規定される。この結論は、技術、農業のみならず、文化全般の意義を有する。ロシア西部、北西部、中央部の住人がその農耕生活において、いくらでも好きなだけ農業の「西欧化」を達成できるとするならば、ロシア南部、南東部、東部およびシベリアの一部の農耕様式においては、粗放農業と呼ばれるものの痕跡が拭い難く残るであろう。明らかにロシアのステップの一部は、農耕者の居住を決して許すことなく、遊牧および特殊な馬飼育の地域（いわゆる「絶対」遊牧地域）として残るだろう。そして再び、この状況は農業技術のみならず、文化全般の意義を有するのである。北アメリカおよびオーストラリアにも半砂漠と乾いたステップがある。しかし、北アメリカおよびオーストラリアの半砂漠と乾いたステップは、これといった歴史的過去もない、住人の堅固な生活もない、ほんとうの無人の地だ。ロシアが見ているステップとは、歴史的なステッ

プである。これは、旧世界のきわめて重要な歴史的要素の一つである、チュルク人とモンゴル人のステップである。このステップの墳丘と墓には秘宝が隠されており、その内容は、所有していた諸民族が古代の実に豊かな諸民族であったことを明らかにしている（いわゆるシベリア遺跡、ノボチェルカスク秘宝等々**）。ステップの農耕様式に特有なものとして必ず残っている粗放性は、それ自体が特徴的であるだけでなく、この粗放性とは、農耕民に独特の「ステップ感覚」を維持させるある種の手段なのだ。心理的、民族的意味において、「ステップ」農民は移行を体現している。それは、ロシアの森林および森林ステップ地帯の農民と、どこで自分の職業を身につけたかに関わらず職人になることのできる経済的「ヨーロッパ人」から、消滅することのない、そして消滅するはずもない遊牧モンゴル人、キルギス人、カルムイク人への移行である。

その存在の黎明期には森林および農耕民族であったロシア民族は、過去数世紀に同じく「ステップ」民族になった。繰り返すが、ここにロシア現代史の極めて重要な状況の一つがある。発展の初期に外的影響としてステップ諸民族の影響を経験したロシア民族は、今日自らステップを取り込んでいるかのようだ。ロシアの根源にその構成原理の一つとして外から植え付けられたステップの原理は、その意義を強め、深めており、不可分の属性となりつつある。そして、「農耕民族」、「工業民族」とともにロシア民族全体の中では、三圃制を行ってはいるが「騎馬民族」が維持され、あるいは形成されているのである。

III

三つの個別の農業問題の中に、ロシアの存在を規定する歴史・地理的状況の総体が現れている。

1. 改良農業のヨーロッパ的手法が適用できるロシアのすべての地域における農業の「西欧化」の問題。この基本的課題は、無数のより小さい課題を内包しており、農耕に関係しているだけでなく、牧畜その他を含んでいる。「ヨーロッパ的」ロシア地域の主要部分とともに、「ヨーロッパ的」環境のオアシスとして、例えば南（山麓部）クバン、テレク、セミレチエ⁹⁾等のヨーロッパ周辺部およびアジア山麓部がある。

2. ステップの農業様式を、ヨーロッパのどこにも見あたらない（見あたらないのはヨーロッパだけではない）独特の地理的条件に適応させる問題。この問題は、主に農耕か、主に牧畜かという二つの問題に明瞭かつくっきりと分かれる。第一の農耕問題は、農耕生活が確立しているか、あるいは確立可能な部分のステップに、第二の牧畜問題は、「絶対」牧畜地域にかかわっているものである。農耕地域について筆頭にあげられる問題は、三圃制を保ちながら、旱魃に対する抵抗力を強めることである（早期の耕作、回数を増やした耕作など）。キルギスの農耕可能な地域だけでなく、黒海、アゾフ海地域のステップのかなりの空間も、降水量においては農耕地帯の限界にある。北アメリカでは、アクモリンスク（年間200mm!）はもちろん、メリトポリ¹⁰⁾（年間350mm!）と同じ降雨量の地域は、砂漠に近い特質を有する（グリニッチから西経105度以西の地域）。ロシアとアメリカは四季の降水量では似ているが、アメリカの西側諸州の南部と比較してみると、アメリカ（岩の多い山々）よりも優れた可能性を与えている平坦な地形、降水の吸収率、土壌の質、また、植物の生育期が始まるまで積雪が保持する水分の蓄えは、ロシアのステップの利点になっている。しかし、農業が強固になるためには、農耕生活を創造的に適応させ、限られてはいるが好ましく、

きわめて特異な性質を完全に利用すべきである。

3. 「ロシア世界」の領域では、四つの農業地帯が次々とって代わる。第一は「ヨーロッパ」農業（ジャガイモとクローバー）、第二はステップ農業地帯（避けられぬ三圃制、小麦）、第三は「絶対」牧畜、最後は小麦の栽培も家畜の飼育もできない砂漠へと移行する。そして、砂漠の克服として、人口灌漑地帯が現れる***。現存する遺跡から判断できる限りでは、ムガン・ステップ¹¹⁾、ペルシャのアストゥラバードその他の郡、アフガニスタン、中国、ロシア・トゥルケスタンの一部にある今日の灌漑システムは、かつて歴史的過去に存在していたシステムのわずかな部分でしかない。自然環境における前提、つまり、利用できる水資源は残っているが、人間の意志が消えてしまった。上述の土地の灌漑システムの復興と拡張が、ロシア民族の手に負えぬとするならば、この問題が現代の他のいずれかの民族の力の及ぶところとなり、そして重要な点は、その民族にとって十分に関心が持てるという状況は、まったくありそうもないことだ。「ロシア世界」の範囲内で生産され、他に譲ってしまわなかった、綿、南の果物、米は、先に名を挙げた諸国の発展だけをロシアに与えることができる。なぜなら、これらの産物によってのみロシアが亜熱帯と接しているからだ。一方、海洋経済においては、海に対してロシアよりも恵まれた位置にある国はすべて、海のそばにある亜熱帯の国と「接して」いる。ステップへの植民を拡大することで、ロシアはステップ世界と親しんでいる。「古代」アジアの経済的復活という課題の中で、ロシアは東方文化世界に触れている。

こうして、経済的カテゴリーの中では、旧世界の領土的「中心」としての、「ヨーロッパ」と「アジア」の経済的結節点としての、歴史全般、文化全般のみならず、経済・地理的意味での「ユーラシア」としてのロシア像が現れてくる。今日の境界内に

おける大国ロシアは、概観できる潜在力において、単に旧世界の一部ではなく、その総体を縮小して再現したものに近い。モンゴルと東部トウルケスタンにロシア圏に取り入れたと想像するならば、ロシア経済は、歴史的「ステップ」世界全体、旧大陸の「中央」部すべてを捉えることになる。そしてロシアの境界内で、この世界と結びつくのが、「周辺=沿岸部」西ヨーロッパの一定の地域や「イラン」圏である。このイラン圏には、経済・地理的意味において中央アジアの「トウルケスタン」も入れることができる。トウルケスタンは人口渾漑地域であり、従って、遊牧「トルコ人」と「モンゴル人」が入っていない空間だからだ。「一定の領土に成長しつつある」、「不動の」「定住」文化地域そのものとして、これらの地域は大陸の奥に引き込まれた、「周辺=沿岸」世界の商業地であるかのようだ。

ロシアの土地が「地中海」圏に接続することによって、つなぎ目は補完される。今日この接続は、南クリミア沿岸およびカフカス・黒海沿岸を領有することで実現している。

「中央」世界と「周辺」の一定部分を結合することで、ロシア=ユーラシアは、旧世界の「核」、「中枢」を捉えている。外に残されたのは、押さえ込まれ、海に押し出された「周辺」だ。まさにこのために、これら「周辺」は、主に海洋経済に参加するよう向かったのだ。ロシア=ユーラシアの経済は、発展の展望において特殊な大陸内世界を形成している。

経済課題と政治課題の間には、明瞭な結びつきがある。経済課題は、安定した政治体制の条件下だけで、包括的パックス・ロシカの庇護下だけで実現可能である。パックス・ロシカの輪郭の中で、私たちの視線は、例外的にパックス・ロマーナ¹²⁾ だけ

に釘付けになってはいけない。モンゴル支配が、その発生と拡大においていかに恐ろしいものであったにせよ、歴史上有名な和睦の中でもっとも包括的であったのがパックス・モンゴリカである。その時代には、「商人とフランス人僧侶」が何ら支障もなくヨーロッパから中国へ行き、13-14世紀のロシア諸公が汗国に忠誠を示すため、何の苦勞もなく（満足もなかっただろうが）19世紀にプルジェヴァリスキー、グルム＝グルジマイロ、ポターニン¹³⁾が多大な困難の末に到達した諸国へと旅したのである。

今何百万ものロシア人を脅かしている過酷な餓死を前にして、この恐ろしい死の脅威が各人に課している義務を前にして、ロシアの経済構造や経済的本質について考えることは幻影と思われるかもしれない。確かに、この緊迫した明瞭な義務は存在する。確かに現在の状況の中では、この考えはほんものの幻影だ。しかし、高度の現実を内包する幻影というものがあり、我々は、ロシアの経済的姿がこのような幻影であると考えている。

ロシアが救われるとするならば、経済的配慮や単なる「集約化」によって救われるのではない。精神的明晰と精神的燃焼を通して予言の道は通じる。しかし、精神へと高揚しながら、神によって与えられた肉体をさげすむのは罪であり、無謀である。

精神の緊張のなかで、惨禍を克服し、排除することで、わが祖国は女性のように身ごもり、子を宿すことができる。大地に身を伏せて、いとおいしいこの世の肉体を大切に愛しなさい。ヴォルホフ川沿岸の草原のエメラルドを！ 穂に包まれた、明るい黄色のステップを！ 神秘の彼方にある、大陸の秘められた奥地の巨大な山々を、天空にそびえる雪の冠を、山麓へと注ぐ水の流れを。水の流れは、灌漑用水路へと分け入れなさい。そして、神の祝福により神の庭が、かつて栄え、今はなくなってしまったその場所に栄えるように。かつて鋤の入ったことのないステップを、鋤で開墾しなさい。

い。そして、未曾有の広がりの中で、ライ麦と小麦の海が身を揺すらせながらざわめき、魅了するように。

原注

* 周知のとおり、ジャガイモはアメリカからヨーロッパに持ち込まれた。しかし、ジャガイモ栽培が極めて重要な農作物の意味にまで発展したのは、まさにヨーロッパにおいてである。

** 「ロシアの遺跡」に関する N.P.コンダコフの研究の中で諸民族移動期の遺跡を取り上げている号を参照のこと（出版者：I.トルストイ伯、サントペテルブルグ）。

*** ボルガ川とドニエプル川下流地域など、ステップ農業地帯においても人口感慨が普及していたことが、問題とされるかもしれない。このような普及が将来において、いかに重要かつ有益であろうとも、そのありうべき意義を過大評価する必要はない。地形と水量の条件から、この灌漑（主に北タブリヤ¹⁴⁾、サマラ郡、アストゥラハン郡）はけっして 100 万デシヤチーナ¹⁵⁾ を超えることはない（現在のロシア・トゥルケスタンの灌漑面積は約 200 万デシヤチーナ）。灌漑設備の整った空間は、経済的な意味においては、きわめて貴重な場所となるだろうが、やはり、何千万デシヤチーナもあるステップ耕地と対比すると、わずかなものである。

訳注

(1) 新世界アメリカに対してヨーロッパ、アジア、アフリカを意味する。

(2) ロシア国家の起源であるキエフ・ルーシは、9世紀半ばから13世紀半ばまで存続した。キエフを中心に政治、経済、文化を発展させたが、12世紀以降は内訌が絶えず、国力は衰えた。「タタールのくびき」は、1236年からロシアがモンゴル軍に侵略され、その後約250年間にわたりキプチャク・ハーン国による間接支配を受けた時代を指して、後のロシア人が使うようになった言葉。

(3) キエフ・ルーシ時代の公一族による領域支配のこと。諸公が各地域に分領公国を有して治めていたが、自立傾向が強く、諸公間の対立や衝突が頻発した。

(4) 聖ソフィア寺院（1037年着工）、聖スパス寺院（1036年以前着工）、聖ノブゴロド・ソフィア寺院（1045-50年建設）、ウスペンスキー寺院（1158-60年建設）は、キエフ・ルーシの最盛期に建造された寺院。特に聖ソフィア寺院は、建立時のモザイク画など、キエフ黄金時代を示す資料を今なお保存している。

(5) 聖ゲオルギー教会：1230-24年建設、スパス・ネレディツァ教会：1198年建設。

(6) 現在のアンカラ（トルコ）。

(7) キエフ・ルーシ成立以前に割拠していた東スラブ諸族。

(8) 耕地を三分割し、休閑、冬穀（小麦・ライ麦）、夏穀（大麦、燕麦）を繰り返す、3年2作の作付け方式で、中世ヨーロッパの典型的農法だった。テレク：北カフカスのクバン川、テレク川の一帯。セミレチエ：カザフスタン南東部。

- (9) アクモリンスク：カザフスタン北部の都市。メリトポリ：アゾフ海に近いウクライナの都市。
- (10) アゼルバイジャンからイランにまたがる、クラ川、アラクス川流域のステップ。
- (12) パックス・ロシカ：ロシア支配による平和。パックス・ロマーナ：ローマ支配による平和。
- (13) ニコライ・プルジェヴァリスキー(1839-88)、グリゴリー・グルム＝グルジマイロ(1860-1936)、グリゴリー・ポターニン(1835-1920)：3人とも中央アジア、シベリア、モンゴルなど東方の研究者で、現地調査を行った。
- (14) クリミヤ半島の旧名。
- (15) 1 デシャチーナ=1.09 ヘクタール。